

「賞田廃寺周辺の遺跡をめぐる」

平成27年3月14日(土)

【位置と環境】

今回の遺跡めぐりは、旭川東岸の平野の古墳時代から古代にかけての遺跡をめぐります。岡山平野は東西の広さが40kmもありますが、その中には吉井川、旭川、高梁川などの3大河川や中小河川が複数流れており、それぞれの河川がつくった平野がまとまったのが岡山平野といえます。それぞれの小平野には、遺跡のまとまりがあり、とくに旭川下流域と足守川下流域の平野の遺跡数や規模が大きく、岡山平野の中心地であったようです。岡山平野は、古代に吉備とよばれていた地域の中心であり、旭川下流域はその中枢であったといえます。

古墳時代後期は、今から約1,500年ほど前の時代ですが、旭川下流域東岸では、周囲の丘陵部に数多くの横穴式石室が築かれ、操山の沢田大塚古墳や賞田の唐人塚古墳のような規模の大きなものも認められます。飛鳥時代から白鳳時代になると、賞田廃寺、幡多廃寺、居都廃寺などの氏寺が建立されます。旭川下流域東岸平野は、古代には備前国上道郡に含まれており、1つの郡域に3寺もの氏寺があるのは、極めて珍しく、この地が古代でも中枢地であったことを示しているといえます。そのため、平野の中央に山陽道が通り、さらに備前国府が想定されています。

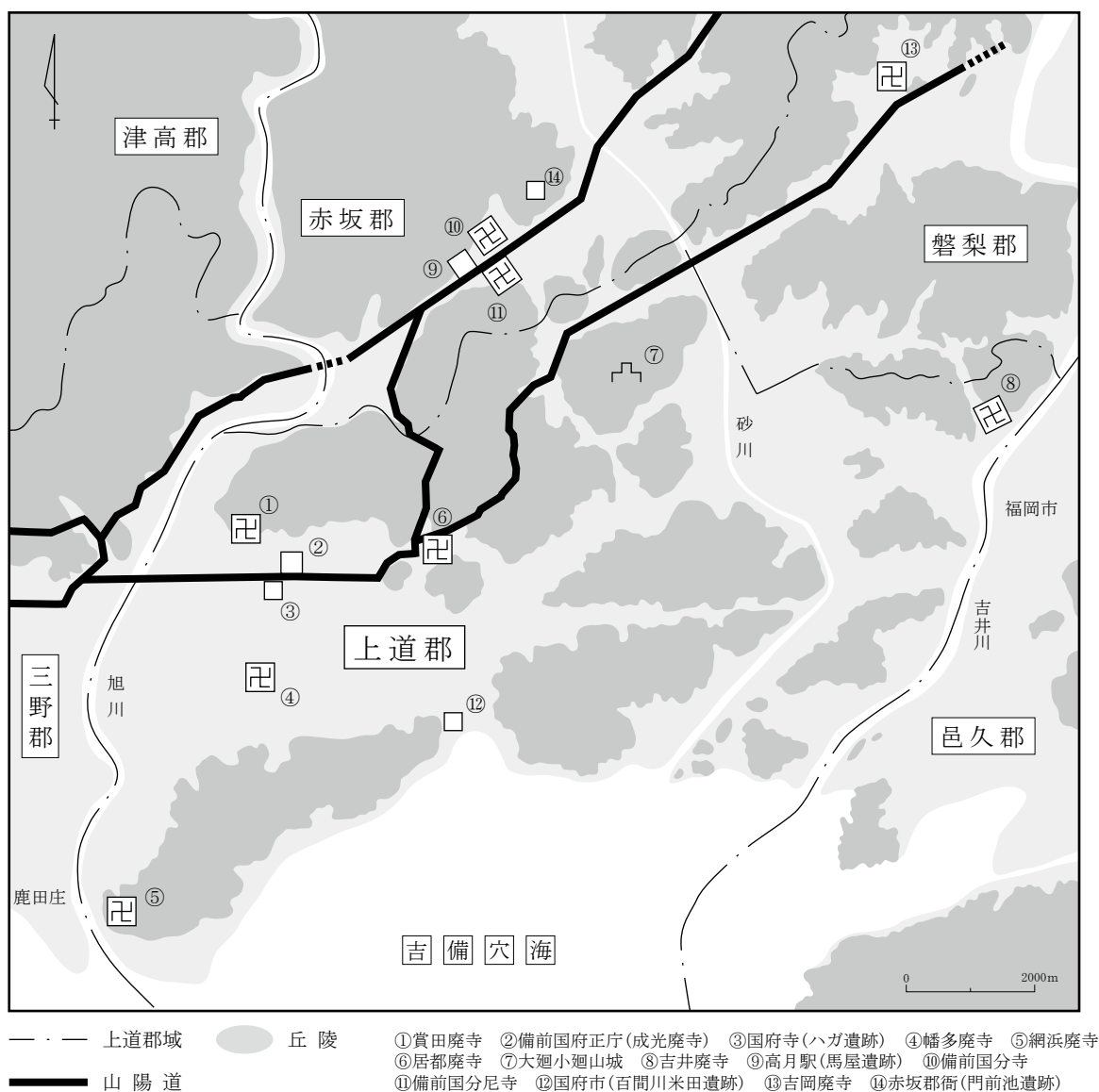


位置図


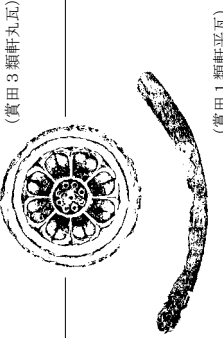
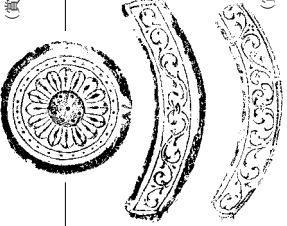
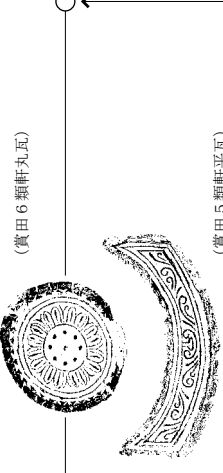




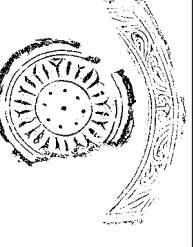
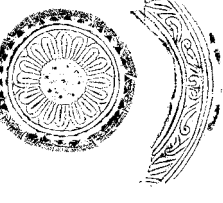
【①幡多廃寺】

幡多廃寺は、賞田廃寺よりもやや遅れて建立された白鳳時代（7世紀末）の古代寺院です。現在は住宅地の一角に塔跡の礎石と基壇状の土壇が残るだけですが、発掘調査の結果、基壇化粧に賞田廃寺と同様の壇上積基壇が使用されたことが推測されています。また、塔の心礎は、県下で最も大きいもので、極めて大規模な塔が建っていたと考えられます。平野部に建立されたため、建物跡は後世の水田開発によって削られてしまい、伽藍配置については明確ではありません。法隆寺式が推測されています。

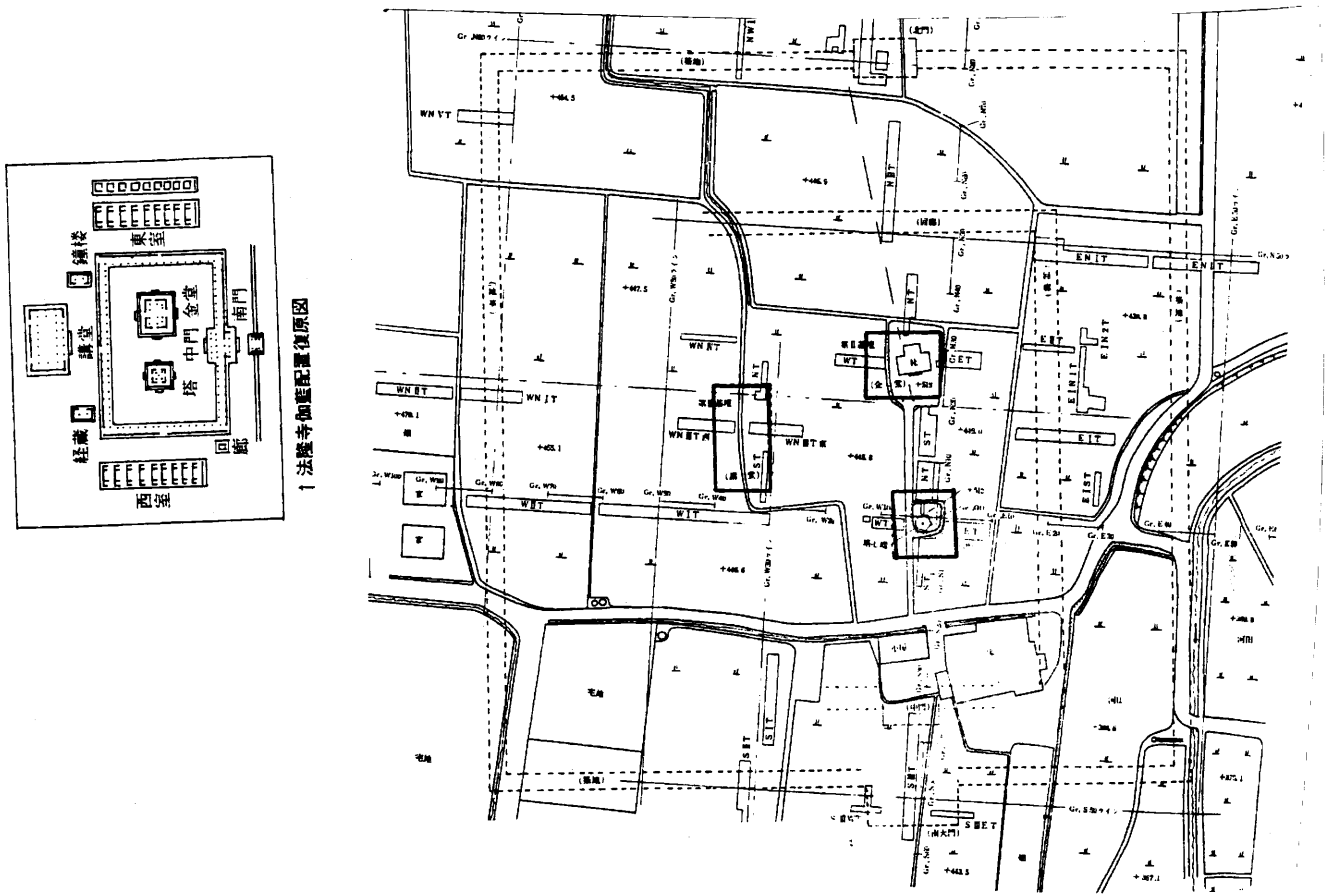
幡多廃寺から出土した軒瓦は、賞田廃寺でも見つかり、両寺の密接な関係を示しています。ただ、その解釈については、同族同士が助け合った結果と考えて、上道氏一族の寺院とされてきました。居都廃寺も同様です。しかしながら、賞田廃寺の軒瓦は、他の2寺院では見つからず、3寺が対等の関係ではなかったと推測されます。したがって、賞田廃寺建立者である上道氏に從属する他氏の建立の可能性も考えることができます。幡多廃寺の名でもある秦氏なども有力候補といえます。



備前国上道郡域の古代寺院と国府関連遺跡

	飛鳥	白鳳	奈良	良
賞田廃寺	 <p>(賞田1類・2類 軒丸瓦)</p>	 <p>(賞田3類軒丸瓦)</p> <p>(賞田1類軒平瓦)</p>	 <p>(賞田4類軒丸瓦)</p> <p>(賞田2類軒平瓦)</p>	 <p>(賞田6類軒丸瓦)</p> <p>(賞田5類軒平瓦)</p>
幡多廃寺		 <p>(幡多第1様式瓦)</p>	 <p>(幡多第2様式瓦)</p>	 <p>(幡多第3様式瓦)</p>
居都廃寺				
網浜廃寺				
古井廃寺				

上道郡域 奈良時代以前 軒丸瓦相関図



幡多廃寺発掘調査図（推定伽藍配置）

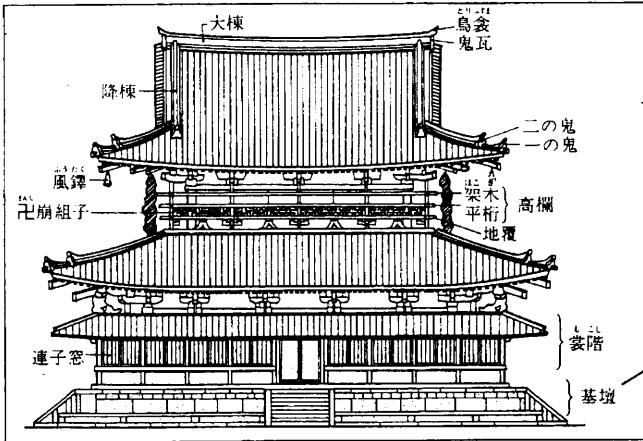
【②県史跡備前国府跡】

古代山陽道の北側に接する位置です。「国長（コクチョウ）」という小字名が、国府の中核である国庁に通じるとして、昭和34年に岡山県の史跡に指定されました。ただし、周辺からは瓦葺き建物が存在したことを示す軒瓦は出土しておらず、南側の国長遺跡での発掘調査でも奈良時代の遺構や遺物は少ない状況です。平安時代以降の国府は別として、奈良時代の国府については、この場所であった可能性は低いように思われます。国長という小字名も、国庁に通じるのではなく、クニナガという人名で、税を集める責任者の名前、いわゆる古代後半の負名制を反映させているという解釈も可能と思われます。

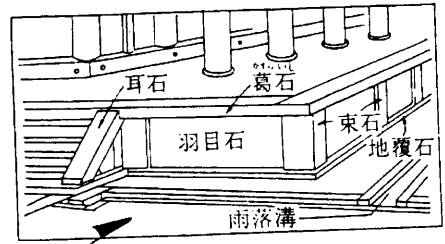
【③南古市場遺跡】

南古市場遺跡は、高島公民館建設に伴って発掘調査されました。調査面積は限られていましたが、山陽道を南北に横切る河道と、橋脚、その周辺に溜まった多量の土器が出土しました。土器は、食器類が大半で、周辺で饗宴が盛んに行われたことを示しています。時期は9世紀から10世紀です。古代の政治の中核地では食器が多量に出土することがわかっており、南古市場遺跡の近辺にもそういった場が存在していると推測されます。

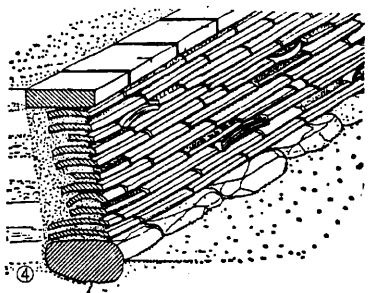
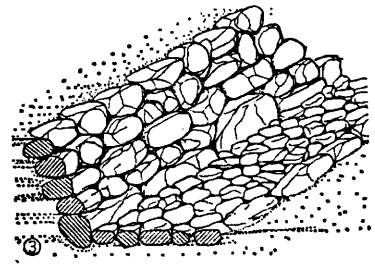
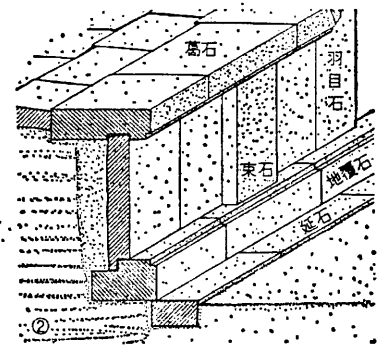
壇上積基壇とは？



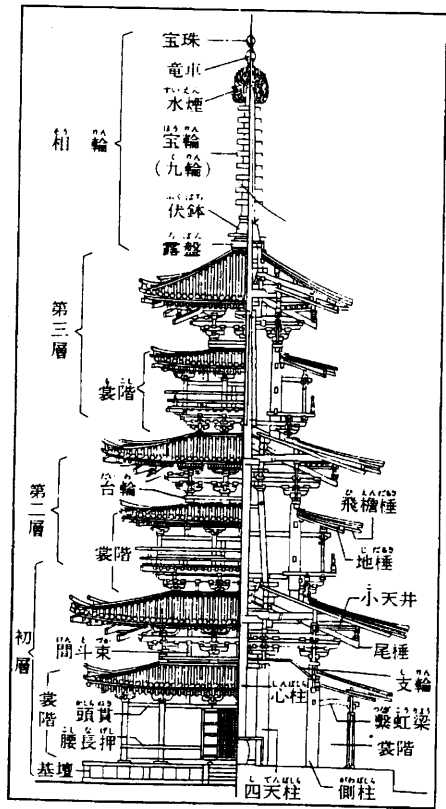
法隆寺金堂正面図 (奈良県)



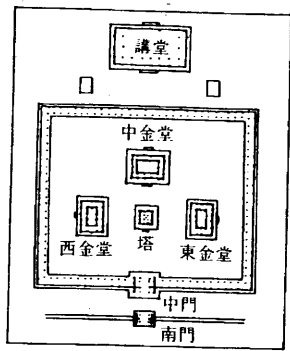
壇上積(唐招提寺金堂, 奈良県)



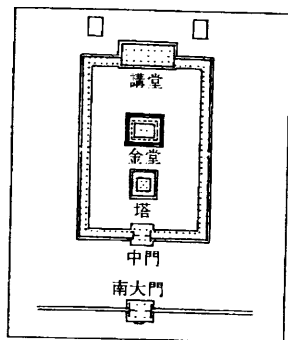
2 壇上積 3 乱石積 4 瓦積



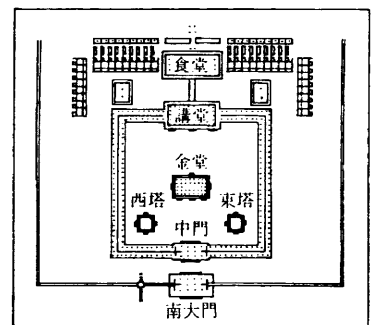
薬師寺東塔立面・断面図 (奈良県)



飛鳥寺伽藍配置図



四天王寺伽藍配置図



薬師寺伽藍配置図

【④賞田廃寺】

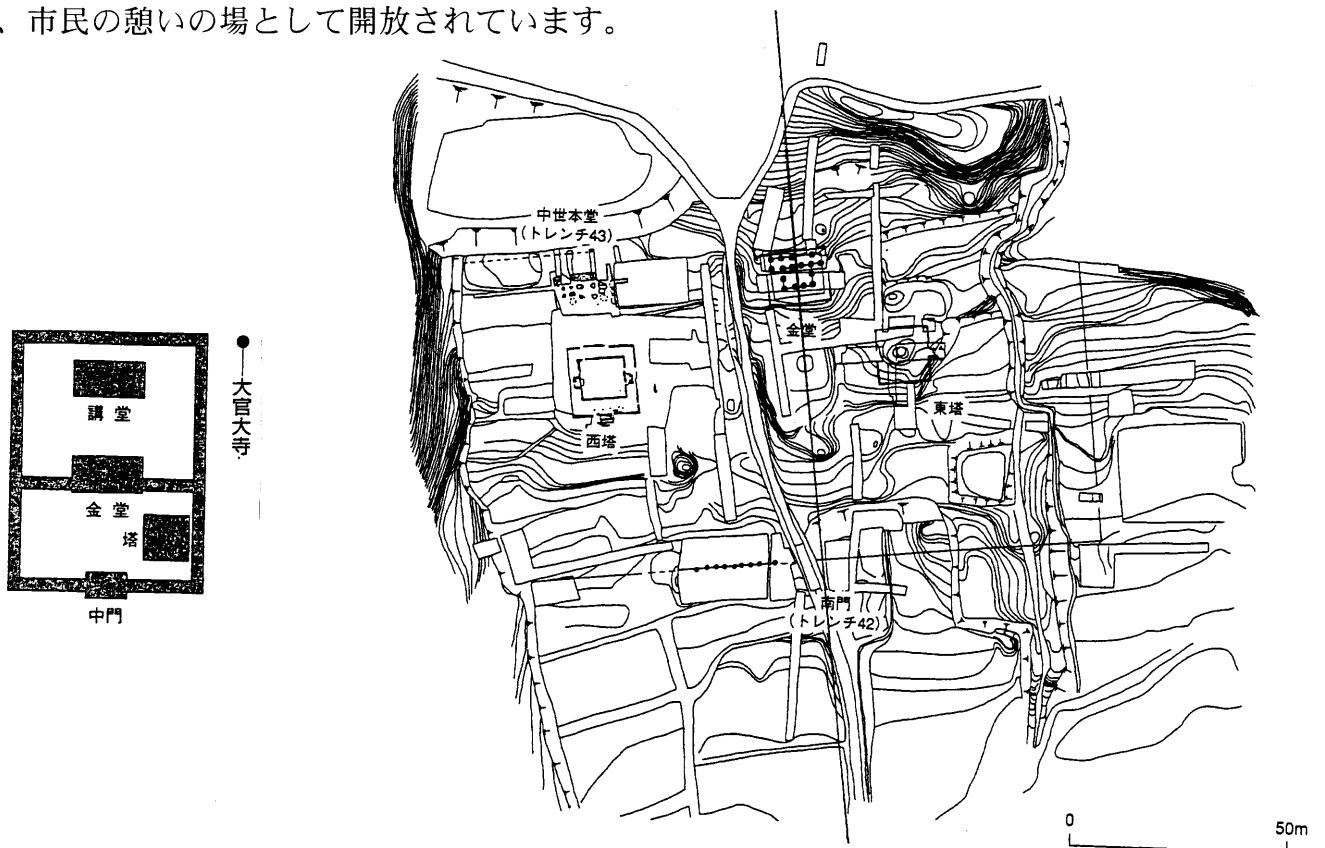
賞田廃寺は、旭川東岸平野の北端に建立された古代寺院で、国史跡に指定されています。発掘調査の結果、畿内の寺院でも使用が希な凝灰岩製の壇上積基壇が採用されていることが確認されました。創建時期は飛鳥時代で、県下で最も古い古代寺院の1つといえます。全国的にも白鳳時代の古代寺院は多数ありますが、飛鳥時代の古代寺院は極めて少なく、年代的にみても賞田廃寺は特別な寺院といえます。

ただし、飛鳥時代の建物は明確ではなく、瓦も少量しか出土していないことから、小堂的な建物であったと推測されます。白鳳時代になると、仏像を安置する金堂が建立され、奈良時代になると金堂の前面に東西両塔が建立されました。一見、奈良県の薬師寺のような姿が想像されますが、西塔が西側に寄りすぎており、東西両塔の中心に金堂がきません。出土した瓦に残った傷跡から、西塔の方が東塔よりも後から建立されており、西塔建立の際に、伽藍全体の中心軸に変更があったか、もしくは東塔と金堂のセットに西塔が付随した可能性が考えられます。

幡多廃寺は、鎌倉時代以降は廃絶していますが、賞田廃寺は室町時代まで存続しており、最終的には西塔背後に本堂が建てられました。本堂はそれまでの寺院の礎石を再利用していますが、この礎石の表面は焼けており、最終的には焼失したと考えられます。

地方における大半の古代寺院は、中世を境に廃絶しています。建立主体者である古代豪族の没落と関係していると考えられます。賞田廃寺は例外的です。建立主体者である上道氏が、高蔵神社の鳥居扁額（正慶元（1332）年製作）にも願主として刻まれており、中世でも地元有力者として生き残ったため、賞田廃寺も存続したと考えることができます。

現在、賞田廃寺は、史跡整備され、奈良時代の建物基壇の様子が復元されています。学習の場として、市民の憩いの場として開放されています。

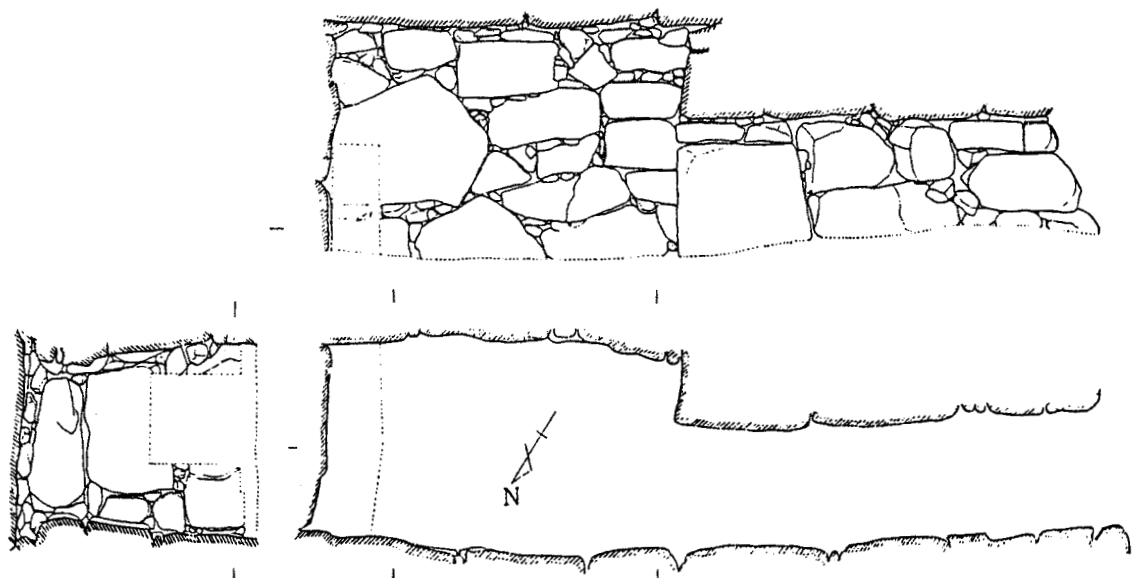


賞田廃寺発掘調査図（推定伽藍配置）

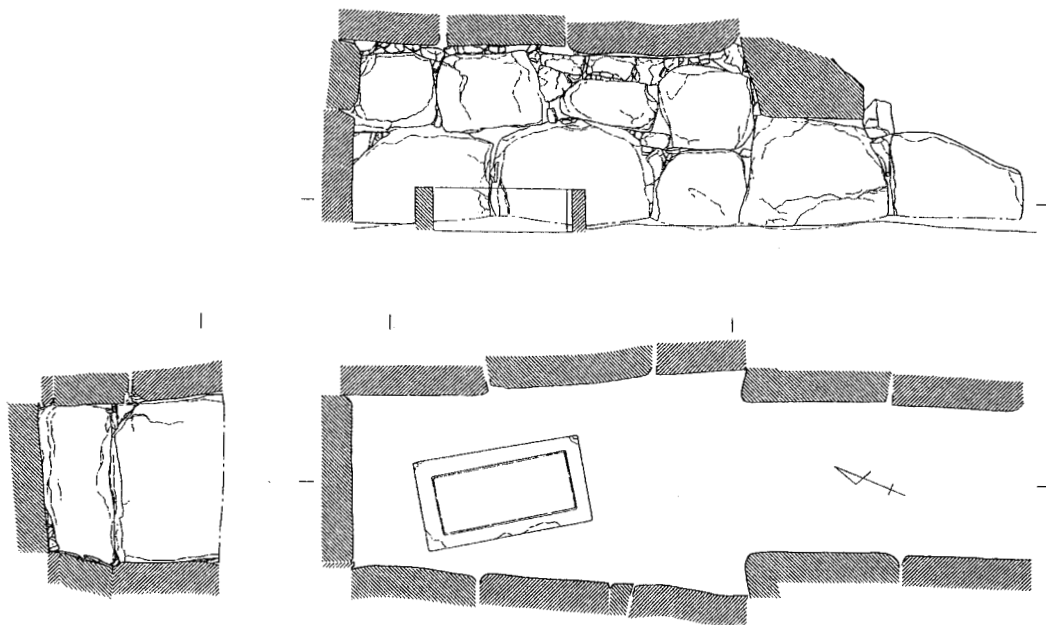
【唐人塚古墳】

賞田廃寺の西側に位置する横穴式石室です。巨石を用いた古墳で、通常の横穴式石室よりもランクが上の古墳として、巨石墳とよばれています。また、単独で築かれており、いくつもの古墳がまとまる古墳群よりも有力者のお墓であると推測されます。

石室全長は 8.8～8.9m、玄室長 5.0～5.1m、玄室幅 2.2～2.9m、羨道幅 2m で、兵庫県の竜山石製の家形石棺の身が置かれています。奈良県の岩屋山古墳の石室とよく似ており、7世紀前半の時期に築かれたと考えられます。賞田廃寺の直前の時期であることから、古墳築造後に、その追善供養も目的として賞田廃寺の建立はあったことも推測されます。古墳から寺への変化の典型例といえます。



沢田大塚古墳



唐人塚古墳



旭東平野の巨石墳